

月潭道澄『黄檗祖徳頌』標註

林 觀 潮

目 次

- 一、解題
- 二、『黄檗祖徳頌』標註
- 三、『黄檗祖徳頌』の複写本
- 四、隠元禪師の生涯

一、解題

『黄檗祖徳頌』は初期黄檗宗の僧である月潭道澄（一六三六―一七一三）が開祖の隠元禪師（二五九二―一六七三）を讃えた詩作である（一）。

月潭は江州彦根（滋賀県彦根市）の出身で、十二歳で京都瑞石山永源寺如雪文和尚の座下に出家した。

慶安四年（二六五二）春より、洛西嵯峨翔鳳山直指庵（京都市右京区北嵯峨北の段町三番地）の独照性円（二六一七―一六九四）に参じた。承応三年（二六五四）七月に独照と共に長崎興福寺へ隠元禪師に参じ、それから

二十年間隠元の侍者を務め、その法化を助けた。隠元示寂の前日、寛文十三年（二六七三）四月二日に京都黄檗山萬福寺で独照に法を嗣ぎ、隠元の法孫となった。

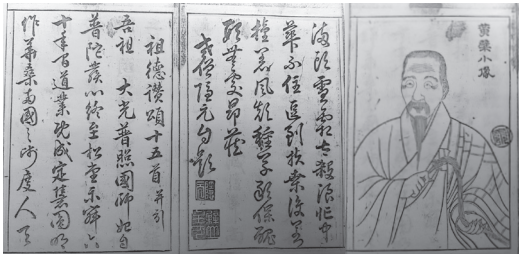
延宝三年（一六七五）四月、隠元のために三年の服喪を終え、京都黄檗山萬福寺を離れて直指庵に帰り、首座として独照を助けた。元禄七年（二六九四）九月、直指庵の二代住持を務め、その後そこに法を弘め、長老の僧として黄檗宗の内外から尊敬を集めた。同じく隠元の侍者を務めた齊雲道棟（二六三七―一七二三）を生涯無二の法友とした。

正徳三年（一七一三）三月、直指庵で菩薩戒会を三日間営み、僧俗およそ五百人に戒を授けた。当年五月、病を示し、遺偈の「生本不生、滅亦非滅、撒手便行、長空一月」を書き残し、八月六日に寂した。月潭は隠元などの唐僧からの薫陶を受け、詩文を能くした。語録に『龍巖集』『蕉窗詩集』『峨山稿』『永明壽禪師山居詩和韻』『巖居稿』『心華剩録』などがある⁽²⁾。

『黄檗祖徳頌』は宝永二年乙酉（二七〇五）十月の作で、当年に刊行されたと思われる。この年は隠元示寂の三十二年目にあたる。月潭はなお祖師を追慕し、『普照国師年譜』などによつて⁽³⁾、隠元の生涯を簡潔に十五首の七言詩で纏め、その徳業を再現しようとした。因みに、十五首の詩題は「普陀發心、夢僧分瓜、槩山脱白、金粟悟道、獅巖住靜、法通授衣、側石自平、祖庭闡法、應聘東渡、駐錫普門、太和開山、常行慈濟、松堂退隱、帝賜徽號、全身歸塔」である。

京都黄檗山萬福寺文華殿に現存する『黄檗祖徳頌』は、封面に「黄檗祖徳頌」と題し、「黄檗小像」、「老僧隠元自題」、「祖徳讚頌十五首并引」によつて構成される。

以下、この『黄檗祖徳頌』の本文について、句読点（ ）、（ ）（ ）を標示し、訓読を付け、また適当に註



黄檗祖德頌(4)

二、『黄檗祖德頌』標註

釈を加える。次に原本からの複写本の写真を付しておく。なお、文末に隠元禪師の生涯を紹介する。字体は、原則として原本の漢字をそのままに写す。写せない字体には、日本の常用漢字を用いる。

黄檗小像(黄檗の小像(5))

滿頭雪霜、空殺浪忙。(滿頭の雪霜なり、空殺し浪忙す。)

中華不住、逗到扶桑。(中華に住さず、扶桑に逗到す。)

設若撞着風顛種草、(たとえ風顛の種草に撞着すれば、)

難保醜態無處昂藏。(保つ難し、醜態の無処に昂藏すること。)

老僧隱元自題。(老僧隱元は自ら題す(6))。

祖德讚頌十五首并引

月潭道澄(7)

(祖德讚頌の十五首並びに引)

吾祖大光普照國師始自普陀發心、終至松堂示寂、六十年間、道業功成、定慧圓明。作華桑兩國之師、度人天無量之眾。巍巍德相、靄靄慈心。上皇賜號、樹君

建刹。種種勝績、讚莫能盡。澄也曾侍中匠、深沐法恩。滅後年尚、追慕曷止。茲揭道蹟十餘事之題名、各系以一章、章八句。雖綴詞陋拙、而聊伸嘆德之誠。倘後生輩采覽記誦、以獲諳開祖之芳猷、則幸矣。（吾が祖の大光普照国師は始めに普陀自ら発心し、終りに松堂の示寂に至り、六十年の間に、道業は功成し、定慧は円明す。華桑両国の師と作し、人天の無量の衆を度す。巍巍の徳相、靄靄の慈心なり。上皇は号を賜い、樹君は刹を建つ。種種の勝績は、讚しても尽くすことは能ず。澄はかつて中匠を侍し、深く法恩を沐す。滅後に年は尚しくなつても、追慕すればなんぞ止まらんや。ここに道蹟の十餘事の題名を掲げ、各々に一章を以つて系し、章に八句なり。綴詞の陋拙と雖も、而して聊かに嘆徳の誠を伸す。もし後生輩は采覧して記誦し、以つて開祖の芳猷を獲諳すれば、則ち幸いなるや。）

普陀發心（普陀の発心）

海上普陀始一登、

海上の普陀に始めて一たび登れば、

丹崖瓊嶂瑞光騰。

丹崖瓊嶂は瑞光を騰がる。

潮音洞裏瞻慈相⁽⁸⁾、

潮音洞の裏に慈相を瞻あげ、

飢飽嶺頭逢異僧⁽⁹⁾。

飢飽嶺頭に異僧に逢う。

殊勝境彰如琢玉、

殊勝の境はあらわし、琢玉の如きなり、

塵勞念盡似銷冰。

塵勞の念は尽くし、氷を銷けることに似る。

煮茶日供百千眾、

茶を煮て日に百千の衆を供え、

綠乳開花碗面凝。

綠乳は花を開けて碗面に凝らす。

夢僧分瓜（僧の分瓜を夢みる）

嚴父客楚不歸郷、

嚴父は楚に客として郷に帰らず、

盡孝安貧養老嬢。

孝を尽くし貧に安んじて老嬢を養う。

私慮塵韁猶未脱、

私かに慮り、塵韁をなお未だ脱げずことを、

故敲仙觀禱冥祥。

故に仙觀を敲いて冥祥を禱る。

三員梵侶夢相遇、

三員の梵侶を夢みて相遇し、

四瓣西瓜分使嘗⁽¹⁰⁾。

四瓣の西瓜を分けて嘗めさせる。

敢保出家縁正熟、

敢えて保ち、出家の縁は正に熟ることを、

醒來賽願屢焚香。

醒めて来て願を賽してしばしば香を焚く。

槩山脱白（槩山に脱白す）

十二峯前投鹽老、

十二峯の前に鹽老に投じ、

周羅剪落現僧儀。

周羅を剪落して僧儀を現す。

圓明戒體通身潔、

戒体を円明して通身は潔なり、

清淨願輪善力推。

清淨の願輪は善力の推すことなり。

方喜九潭龍產子、

方に九潭の龍は子を産むことを喜び、

咸傳萬福鳳生兒。

みな萬福の鳳は兒を生むことを伝う。

寄言郷族休嘲笑、

寄言し、郷族は嘲笑せずことを、

今日東林有遠師(1)。

今日東林に遠師有る。

金粟悟道(金粟に道を悟る)

遠登金粟見宗盟、
求道參玄志銳精。

遠く金粟に登つて宗盟を見え、
道を求め玄を参じて志は鋭精なり。

萬指叢中忘自己、

萬指の叢中に自己を忘れ、

一巴掌下悟平生。

一巴掌の下に平生を悟る。

火杖擎起賊身露、

火杖を擎起すれば賊身は露し、

筋斗打翻眾目驚(12)。

筋斗を打翻して衆目は驚く。

出窟駿貌多意氣、

出窟の駿貌は意氣多き、

機前誰觸爪牙寧。

機前に誰か爪牙の寧を触れんや。

獅巖住靜(獅岩に住靜す)

千尋壁立一獅巖、

千尋まで一獅岩は壁立し、

高構禪關遠俗凡。

高く禪関を構えて俗凡を遠ざける。

種竹栽梅幽趣足、

竹を種え梅を栽えて幽趣は足り、

喝天棒月古風巖(13)。

天を喝し月を棒して古風は巖とす。

半肩畦服從教破、

半肩の畦服は従つて破りせしむ、

一味瓊齋不厭鹹。

一味の瓊齋は鹹を厭わず。

衲子來詢西祖意、

衲子は来て西祖の意を詢ねれば、

答言野鳥語喃喃⁽¹⁴⁾。

答言す、野鳥の語は喃喃なることを。

法通授衣（法通より衣を授ける）

費翁室内付龜毛、

費翁の室内に龜毛を付し、

再返巖間獨養高⁽¹⁵⁾。

再び岩間に返つて独りに高を養う。

將謂深藏聞妙密、

將に謂い、深く藏して妙密を聞くことを、

何圖四海道聲軻。

何んぞ四海に道聲の軻けることを図らんや。

信衣傳到法通使、

信衣を伝えて到り、法通の使なり、

祖席要真濟水濤。

祖席は真の濟水の濤を要す。

皓叟負囊曾入夢、

皓叟は囊を負つて曾て夢に入り、

看斯瑞應嘆奇遭⁽¹⁶⁾。

この瑞応を看れば奇遭を嘆す。

側石自平（側石は自ら平らにす）

側石如舟當路橫、

側石は舟の如く当路に横たわり、

朝來忽見自端平⁽¹⁷⁾。

朝に来て忽ちに自ら端平なることを見る。

軒知一夜默然祝、

軒に一夜の默然の祝りを知り、

足驗前程法道行。

足りて前程に法道の行うことを驗す。

徑塢喝時成片裂、

徑塢に喝す時に片裂を成し、

虎丘講處點頭輕。

虎丘に講じる処に點頭は軽くなり。

世人莫訝甚奇異、

世人は甚だ奇異を訝く莫れ、

為顯高流心術誠。

為に高流の心術の誠を顯す。

祖庭闡法（祖庭に法を闡く）

檠岫鍾靈六六峯、

檠岫は鍾靈し、六六の峯なり、

雄哉運祖大禪叢。

雄なるや、運祖の大禪叢。

獅王一到補師席、

獅王は一たび到つて師席を補えば、

毳侶駢臻參道風。

毳侶は駢臻して道風を參じる。

堂構卻教從地起、

堂構は却つて地より起せしむ、

法燈長見互天紅。

法燈は長く見えて天に互つて紅くなり。

焜煌龍藏朝廷賜、

焜煌として龍藏は朝廷の賜いなり、

翻閱恭酬帝渥隆⁽¹⁸⁾。

翻閱して恭しく帝渥の隆を酬いる。

應聘東渡（聘に応じて東渡す）

逸公三請志虔誠、

逸公は三たびに請い、志は虔誠なり、

萬里樽桑泛巨瀛⁽¹⁹⁾。

萬里の樽桑に巨瀛を泛べる。

海若護師舟速到⁽²⁰⁾、

海若は師を護り、舟は速やかに到り、

陳僊垂識道當行⁽²¹⁾。

陳僊は識を垂れ、道は当に行う。

故邦皂白休留戀、

故邦の皂白は留戀する休れ、

異域靈山似喜迎。

異域の靈山は喜迎に似る。

寶林初登崎上寺、

寶林に初めて登れば、崎上の寺なり、

法雷震地眾聽驚。

法雷は地を震え、衆聽は驚く。

駐錫普門（普門に錫を駐す）

錫寓普門恰六秋、

錫を普門に寓して恰も六秋なり、

隨方怡樂唱徽猷⁽²²⁾。

隨方に怡樂して徽猷を唱える。

安居雖有園亭好、

安居して園亭の好し有ると雖も、

縱目卻無峰壑幽。

縱目すれば却つて峰壑の幽無し。

甘露滾滾霑普地、

甘露は滾滾たり、普地を霑い、

慈雲靄靄覆千洲。

慈雲は靄靄たり、千洲を覆う。

故山屢寄催歸信、

故山はしばしば催歸の信を寄り、

難奈主人苦扳留。

いかんぞ主人は苦しく扳留せんや。

太和開山（太和に開山す）

雒南勝地泰畝場⁽²³⁾、 雒南の勝地は泰畝の場となり、

鈞施繁隆剏寶坊。 鈞施は繁隆して寶坊を剏る。

唐國妙工粧聖像、 唐國の妙工は聖像を粧い、

暹羅靈木構高堂。 暹羅の靈木は高堂を構える。

門庭恢廓林巒暎、 門庭は恢廓し、林巒は暎り、

棒喝交馳龍象驥。 棒喝は交馳し、龍象はあがる。

一代開山功績就、 一代開山の功績は就り、

蘭孫桂子永聯芳。 蘭孫桂子は永く芳を聯ねる。

常行慈濟（常に慈濟を行う）

吾翁不亞永明師、 吾が翁は永明師につがず、

憫物克行菩薩慈。 物を憫れんで克く菩薩慈を行う。

贖命放生難筭計⁽²⁴⁾、 命を贖い生を放すことは筭計し難きなり、

度人施戒沒邊涯。 人を度し戒を施すことは辺涯沒し。

雜華嘗冤資恩有、 雜華は冤にかえてして恩有を資し、

般若兼持壯道基。 般若は兼ねて持つて道基をさかんにす。

或復當機提正令、 或いはまた機に當つて正令を提げ、

銅睛鐵眼莫能窺。

銅睛鐵眼は能く窺う莫れ。

松堂退隱（松堂に退隱す）

雙邦領眾踰從、心

雙邦に衆を領いて從心に踰え、

卸擔投閒隱翠林。

担を卸し、投閒して翠林に隠れる。

掩室猶嫌雲水謁、

掩室すればなお雲水の謁えを嫌い、

問安復有宰官臨。

問安すればまた宰官の臨み有る。

滿顛雪皎增康壯、

滿顛の雪は皎として康壯を増し、

千偈濤翻自嘯唵。

千偈の濤は翻れば自ら嘯唵す。

時上鶴亭行樂處、

時に鶴亭の行樂処に上り、

應真相貌見應欽。

應真の相貌は見えればまさに欽うべし。

帝賜徽號（帝は徽号を賜う）

禪窟宏開播洛畿、

禪窟を宏開して洛畿に播き、

名揚北闕上皇知。

名は北闕に揚げ、上皇は知る。

降香屢到五雲麓、

降香はしばしば五雲麓に到り、

賜號欽稱一國師⁽²⁵⁾。

賜號は一國師を欽稱す。

設利鎮山光燦爛、

設利は山を鎮め、光は燦爛なり、

宸奎藏匣墨淋漓。

宸奎は匣に蔵れ、墨は淋漓なり。

神龍呵護存悠久、

神龍は呵護し、悠久に存じ、

應壯梵園與帝基。

まさに梵園と帝基をさかんにすべし。

全身歸塔（全身は塔に歸す）

八旬有二道貌尊、

八旬有二になれば道貌は尊び、

期與諗翁同壽元。

諗翁と寿元を同じくすることを期す。

俄罷津梁辭濁世、

俄に津梁を罷えて濁世を辭し、

遺留祇夜耀山門。

祇夜を遺留して山門を耀す。

雙林變白曉風慘、

雙林は變白し、曉風はいたみ、

曇萼零紅晚日昏。

曇萼は紅をおとし、晚日は昏なり。

誰識其中離生滅、

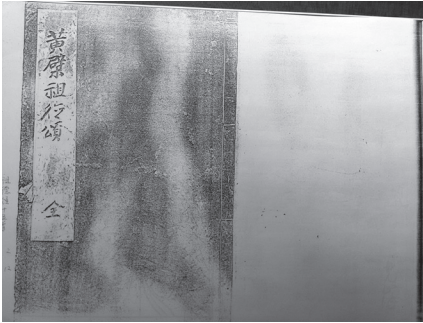
誰か其の中に生滅を離れることを識り、

全身闕塔蔭兒孫⁽²⁶⁾。

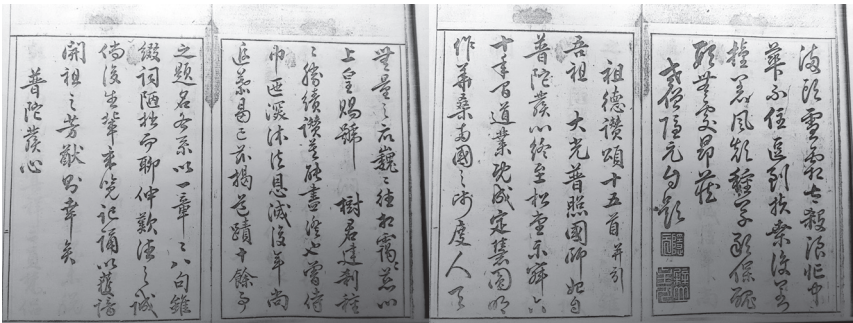
全身は塔に闕じて兒孫を蔭う。

皆寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盟拜書⁽²⁷⁾。（時に寶永乙酉歲良月の穀旦、峨山の不肖の孫の道澄は焚盟し、拜して書す。）

月潭道澄『黄檗祖德頌』標註



三、『黄檗祖德頌』の複写本



海三普陀如一空丹崖紫嶂
瑞光騰激音洞裏巖若如
鐵壁嵌嵌連雲傳殊勝境
如海公崖秀合若似消冰
茶口竹百千叢綠乳為花

破而體

夢僧不取

巖去空建不為御書空為
空去之嫌私慮差輕說未脫
敢放仙觀構冥祥三頁覽侶

喜如過四辦西依分使青
敢保空家信正熱醒來雲影
塵紫香

藥山脫白

十二時前投鐘空周羅古友

現僧儀圖於戒體通力索
借淨願禱若力推方善九澤
龍崖子咸信為指風生見言
空柳枝林啼笑今日東林
三這師

空乘悟道

志在空乘見玉皇本為奉
云玉鏡稿為指叢中忘自己
已巴掌下信平生少杖穿記
賦為靈筋斗打翻若目露出

空乘觀高壽壽瑞亦推詞
依才際

柳農信辭

千壽慶三一柳農高捧祥
闡志修九種竹或梅出樹呈

喝天指月六風露中有吐眼
從破一珠氣齊不厭鹹袖
子未詢西祖之卷之孫白
謔喻

法通按衣

黃菊空內付毫毛再返莊言
稽者高借得佛堂首祿密
何獨四海是香期信衣信為
法通使視希要長信在傳
皓文且兼空入身在斯瑞衣

喝為連

佛名空
佛名出舟高欲快其言
身空平野如空默然觀
呈驗前程往道行徑瑞鳴時

成片裂痛互憐言然於極世
人言其甚高靈為助高流
心術誠

祖庭問信

象油鐘靈六之障障或運祖

六經聚柳三一為補師帝
羅侯併漆為是亦手捧中於
從必湯信惶長見巨天紅銀
燐龍藏即這賜龍潤茶酬
帝法信

應聘來信

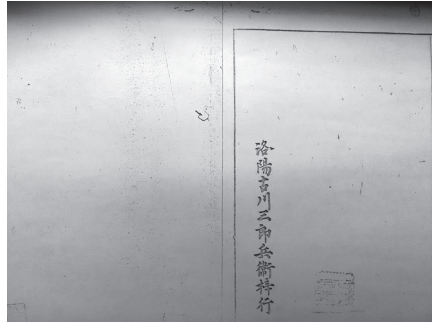
遠以三信志虔誠萬里擗累
從巨瀛海子僕師舟遂到陳
樓岳樞老蒼川紅那皂白依
留香空城靈山似香途葉

月潭道澄『黄槩祖德頌』標註

<p>身聯芳 帝行慈濟 吾為不亞亦明師 憫物克終 甚隆恭讀命 救世難等竹 度人施戒後邊 蓮華普善光</p>	<p>維南大地春輪揚 釣於紫 陰靄葉坊秦園抄 工極聖傳 道羅堂木構亭 堂門庭恢宏 林秀暎構 唱交地 赫系 孫 一代為 山比後 就 孫 桂 子</p>	<p>大和開山 雖自初登峰 豈出寸靈儀 實吾地慈雲 雷震于物故 山為當催憐 信 結 未 之 人 共 披 留</p>	<p>枝初望崎 上乃修富實地 象莊常 駐錫善 錫寓柳林 恰入秋隨方怡示 唱微猷 安衣 雖有園亭好</p>
---	--	---	--

<p>龍何惜存修久 居性黃園 五帝基 全身歸塔 八旬有二道 於 昔 期 之 信 而 曰 著元儀 蒙 澤 梁 辭 尚 也</p>	<p>帝賜微辭 極宮宏開 撥落 裁 久 為 北 國 不皇 知 降 音 為 五 帝 基 崇 崇 孫 欽 補 之 國 師 法 利 濟 必 元 懷 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p>	<p>開 德 翠 林 掩 雲 煙 雲 雲 為 偶 洞 出 沒 多 宰 官 臨 內 願 雲 皎 性 康 壯 千 倚 倚 翻 日 嘯 嗚 心 上 歸 亭 行 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 兄 之 欽</p>	<p>資 具 有 般 多 益 持 壯 是 基 或 後 宮 微 提 正 之 銅 財 法 眼 美 終 究 松 雲 進 德 雙 那 錦 衣 踰 從 人 卸 塔 放</p>
---	--	--	--

<p>寶水己酉年正月 慈 城山山有孫 是 德 崇 崇 錄 書 原 本 所 藏 者 黃 槩 堂 文 庫 冊 號 二 二 一 一</p>	<p>遠 宮 祇 衆 耀 山 一 雁 林 雲 白 曉 風 掃 葉 響 零 紅 晚 日 昏 以 識 之 中 誰 能 滅 令 勇 劍 焚 崔 兒 孫 皆</p>	<p>龍何惜存修久 居性黃園 五帝基 全身歸塔 八旬有二道 於 昔 期 之 信 而 曰 著元儀 蒙 澤 梁 辭 尚 也</p>	<p>帝賜微辭 極宮宏開 撥落 裁 久 為 北 國 不皇 知 降 音 為 五 帝 基 崇 崇 孫 欽 補 之 國 師 法 利 濟 必 元 懷 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p>
--	--	---	--



『黄檗祖徳頌』複写本

四、隠元禪師の生涯

隠元隆琦は明末の臨済宗の禪僧で、日本黄檗宗の開祖である²⁸。日本皇室より大光普照国師、仏慈広鑑国師、径山首出国師、覚性円明国師と特諡され、また真空大師、華光大師と勅賜された。一五九二年（明朝万曆二十年、日本文禄元年）十一月四日に生まれ、一六七三年（日本寛文十三年、清代康熙十二年）四月三日に寂した。

隠元禪師は明の福建省福州府福清県万安郷靈得里東林村（福清上逕鎮東林村）に生まれる。俗名は林曾昂、号は子房である。六歳の時に父が行方不明となり、幼少より仏教に発心する。二十一歳、江南一円を回つて父を捜したが果たせなかった。二十三歳、浙江省普陀山に登つて潮音洞主のもとに参じ、在俗信者でありながら一年ほど茶頭として奉仕した。

二十九歳、明の萬曆四十八年（一六二〇）二月、故里福清の古刹で、唐の希運禪師も住した黄檗山萬福禪寺の鑑源興寿（？—一六二五）の下で出家した。天啓元年（一六二二）の春、北へ赴き、崇禎三年（一六三〇）三月の福清黄檗山萬福禪寺へ帰るまでの十年間、主に浙江省内を行脚し参学した。天啓四年（一六二四）五月、浙江省嘉興府海塩県金粟山広慧禪寺で密雲円悟（一五六一—一六四二）の会下に参じ、坐禪に専念した。激しい修業の末、二年後、天啓六年（一六二六年）冬のある日、大悟の瞬間を迎え、仏法の底に徹し、禪僧として見事に立った。

崇禎三年（一六三〇年）三月、金粟山広慧禪寺の住持である密雲円悟は、福清黄檗山萬福禪寺に晋山住持し、八月に広慧禪寺に戻った。この時、隠元は密雲に随行して福清黄檗山萬福禪寺に帰った。その後、萬福禪寺を出て福清の獅子巖で修行した。

一六三三年（崇禎六年）十月、密雲円悟の法子である費隠通容（二五九三―一六六二）は福清黄檗山萬福禪寺に晋山し、一六三六年の春まで住持した。この間、一六三四年（崇禎七年）の春、隠元は費隠の法を嗣ぎ、臨済宗の第三十二伝となった。

四十六歳、一六三七年（崇禎十年）十月、福清の信者たちの招請によって、隠元は福清黄檗山萬福禪寺の住持の座に就いた。隠元禪師の福清黄檗山住持は、一六四四年（崇禎十七年）三月までの初任と、一六四六年（南明隆武二年、清の順治三年）正月から、一六五四年（南明永曆八年）五月までの再任との二回に亘った。その足掛け十七年の経営によって、禪師は黄檗山を中国東南の一大禪林に築き上げ、黄檗山教団を結成し、臨済宗黄檗派を創った。

大陸における明末の臨済宗黄檗派は隠元禪師などの渡航によって、日本に伝えられ、黄檗宗と再生された。一六五三年（南明永曆七年、清の順治十年）十二月一日、長崎の唐人寺であった興福寺、崇福寺、福濟寺を中心とする信者たちの度々の懇請に応じて、隠元禪師は日本渡航を決めた。

六十三歳、一六五四年（南明永曆八年、清の順治十一年、日本承応三年）五月十日、隠元禪師は福清黄檗山を離れて厦門（アモイ）へ向かい、六月二十三日、厦門より長崎へ渡航し、七月五日の晩、長崎に着き、翌日迎えられて興福寺に進み住持した。同年十月十五日から、興福寺で冬期結制を行い、翌年の一六五五年（日本明暦元年）正月に解制した。この間、隠元の高徳と禪風を慕う具眼の僧や学者たちが日本各地から興福寺

に雲集し、僧俗数千とも謂われる活況を呈した。

一六五五年（日本明暦元年）五月二十三日、隠元はまた福州出身の檀越に請われて崇福寺の住持を兼任した。同年八月九日、妙心寺元住持の龍溪性潜（一六〇二—一六七〇）の懇請により、隠元は長崎興福寺を離れ、摂州慈雲山普門寺へ赴き、九月六日、普門寺に進み住持し、十一月四日、開堂説法を行った。一六六一年（日本寛文元年）八月までの六年余りに、隠元は普門寺に在住し、多くの信者と檀越を得た。

隠元禪師は、当初、渡日三年の約束があり、故国からの再三の帰国要請もあつて度々帰国を決意したが、龍溪性潜らが引き止め工作に奔走した。一六五八年（日本万治元年）十一月四日、隠元は江戸において幕府四代將軍徳川家綱（一六四一—一六八〇）との会見に成功した。一六五九年（日本万治二年）五月、隠元は幕府より新寺を開創させるため、山城国宇治郡大和田に寺地を賜った。

一六六一年（日本寛文元年）五月八日、七十歳の隠元は新寺を創り始め、望郷の念を込め、故郷福清の古刹と同名の黄檗山萬福禪寺と名付け、八月二十九日、京都黄檗山萬福禪寺に晋山した。これ以後、福清の黄檗山萬福禪寺は古黄檗とも呼ばれるようになった。

一六六三年（日本寛文三年）一月十五日、隠元は京都黄檗山萬福禪寺の法堂において祝国開堂を行った。この盛大な法会によつて、隠元の禅風は内外に承認され、日本禅宗の中に、元来の曹洞宗、臨済宗の二派に加えて新たに黄檗宗の一派が開立されることになった。当年十二月一日から八日までの間、民衆に対して京都黄檗山萬福禪寺で初めての三壇戒会が厳修された。

京都黄檗山萬福禪寺の開創によつて、隠元は日本禅宗の一派の開祖となつた。その人望を慕い、後水尾法皇を始めとする皇族、また幕府要人を始めとする各地の大名、多くの商人たちが競つて帰依した。

隠元は歴とした明代の臨済宗を嗣法し、臨済正宗を名乗り、独特の威儀を持った。その『黄檗清規』は、乱れていた当時の日本禅宗各派の宗統・清規の更正に大きな影響を与え、特に卍山道白（一六三六―一七一五）などによる曹洞宗の宗門改革では重要な手本とされた。もつとも、隠元の禅風や叢林としての清規は当時の明代の臨済宗に倣っていたので、既に宋元時代に伝来して日本に根付いていた臨済宗とは趣を異にした。その違いにより、自ら一派として「済家黄檗山萬福禅寺派」を形成した⁽²⁹⁾。この故、江戸時代、隠元を開祖とする京都黄檗山萬福禅寺の禅宗は、社会的に「臨済正宗黄檗山萬福禅寺」あるいは「臨済正伝黄檗派」と呼ばれ、一八七六年（日本明治九年）以後、公式的に黄檗宗と呼ばれる。

一六六四年（日本寛文四年）九月四日、隠元は京都黄檗山萬福禅寺の後席を法子の木庵性瑠（一六一一―一六八四）に移譲し、自ら山内の松隠堂に退き、楽しく黄檗山の発展を眺めていた。

八十二歳、一六七三年（日本寛文十三年）正月、隠元は体調の衰えを覚え、往生を予知し身边を整理し始めた。四月二日、後水尾法皇（二五九六―二六八〇）から「大光普照国師」号が特諡された。翌三日、遺偈を認めて示寂した。二十二年後の一六九四（日本元禄七年）九月、徳川幕府の許可によって国師号が公開され、以後、普照国師とも称される。

隠元禅師の弘法は、禅風思想、戒律清規、法式儀軌、教団組織、寺院制度などの面から、当時の日本仏教に多大な影響を与え、各宗派の復興運動に大きく貢献した。仏教以外にも、隠元とその弟子たちは、明清の文化や文物をも伝え、哲学、文学、語言、文字、また建築、雕塑、絵画、印刷、また音楽、医学、茶道、飲食、また書道、篆刻などの面から、江戸時代の社会生活全般に影響を与え、黄檗文化の現象を成した⁽³⁰⁾。今日に至り、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、日本近

世の文化を語るとき、隠元禪師や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている⁽³¹⁾。例えば、普段の日本人の生活で用いられる隠元豆や煎茶は、隠元禪師の伝来ともされる。

隠元禪師の功績を讃え、日本皇室は後水尾法皇からの大光普照国師の封号を始めとし、五十年ごとの隠元遠忌に、諡号を賜い、慣例となった。一七二二年、靈元上皇より仏慈広鑑国師、一七七二年、後櫻町上皇より径山首出国師、一八二二年、光格上皇より覚性円明国師、一九一七年、大正天皇より真空大師、一九七二年、昭和天皇より華光大師を特諡した。

隠元禪師の功績はその故国でも讃えられる。二〇一五年五月二十三日、中国国家主席習近平は北京人民大会堂で行われる中日友好交流大会に参加し、隠元禪師の事跡を提起し、「私は福建省で仕事をしていた当時、中国の名僧、隠元大師が日本に渡った話を知りました。日本で隠元大師は仏教の教義だけでなく、先進的文化と科学技術も伝え、日本の江戸時代の経済社会発展に重要な影響を与えました。二〇〇九年、私が日本を訪問した際、北九州などで両国人民の途切れることのない文化的根源と歴史的つながりを直接に感じました。」と言った⁽³²⁾。このように、現に隠元禪師は日中友好の懸け橋として重んじられている。

註

(1) 『黄檗祖徳頌』、一巻一冊。月潭道澄著。日本寶永二年乙酉(一七〇五)刊。卷末標記：「峇寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盥拜書。」又標記：「洛陽古川三郎兵衛粹行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。

(2) ① 『龍巖集』、四卷二冊。月潭道澄著。詩集、刊年は不詳。卷一の一首目の詩は「乙卯夏回峨山作」とする。

乙卯、延寶三年(一六七五)、時に月潭は京都黄檗山萬福寺を離れて峨山直指菴に帰った。京都黄檗山萬福寺文

- 華殿存。②『蕉窗詩集』、六卷二冊。月潭道澄著。貞享乙丑二年（一六八五）高泉性激作序、江戸時代刊本。京都黄檗山萬福寺文華殿存。③『峨山稿』、二卷二冊。月潭道澄著。元禄十年（一六九七）自序、元禄十一年戊寅（一六九八）刊本。自序…「道本無言、籍言顯道。…。元禄丁丑歲仲夏日月潭叟泚筆於直指心華室。」卷末刊記…「元禄十一年戊寅歲林鐘上浣日。書林古川三郎兵衛梓行、同林耶彌白氏共壽梓。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ④『永明壽禪師山居詩和韻』、一卷一冊。月潭道澄著。元禄十二年己卯（一六九九）自序、元禄十三年庚辰（一七〇〇）刊本。卷末刊記…「元禄庚辰四月上旬。洛陽書肆古川三郎兵衛刊行。京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ⑤『巖居稿』、六卷三冊。月潭道澄著。元禄十六年癸未（一七〇三）自序。序言…「此集乃余嚮居龍巖山房時所著之餘稿也。或舒嘯雲山泉石、或贈會縑素道友、一時率真適意之語耳。…。元禄癸未歲菊月上浣心華室老衲澄自敘。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。⑥『心華剩錄』、五卷五冊。月潭道澄著。寶永七年庚寅（一七一〇）自序。享保六年辛丑（一七二二）刊本。卷末刊記…「享保六年龍集辛丑孟正吉日謹識。皇都書林寺町通松原上町古川三郎兵衛雕行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- (3) 『普照國師年譜』、二卷、南源性派・高泉性激撰。日本元禄七年（一六九四）、国師号が公開された年以後に完成。『新纂校訂隠元全集』附録所收、五〇八七―五二六四頁。『新纂校訂隠元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。
- (4) 表紙の題目。
- (5) 見返しの頁に隠元禪師の法像。
- (6) ここに、陰文の方印「隠元」、「槃山主人」がある。
- (7) 月潭道澄、原本に無い。今、加える。
- (8) 『普照國師年譜』…「萬曆四十二年甲寅。師二十三歲、是春附進香舟至南海普陀山朝禮觀音。意謂菩薩神力、必能陰助尋父之願。及到山、忽見佛境殊勝、大非人世、一時凡念冰釋。遂發心投潮音洞主爲道人、領茶頭執事、日供萬衆、不以爲勞。洞主嘆曰…此佛子真菩薩之使也。其信心不懈忘如此。按師晚錄云…予昔因朝禮普陀大士、遂

發心出家、今五十餘年矣。近聞遭紅夷之厄、不能無感於衷焉。」『新纂校訂隱元全集』五一〇三頁。『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。

- (9) 『普照國師年譜』…「萬曆四十三年乙卯。師二十四歲。寓普陀、竊念此處乃菩薩蔭人福報之所、苟非精修實學者、曷足爲吾師。乃往茶山尋祇園老宿。過飢飽嶺、忽值老僧龐眉鶴髮、懷中取糶與師。師嘗一飽、擡頭禮謝。老僧隱矣。疑爲神僧。是春三月、附香船歸聞省母。母喜從天降。即勸母事佛持齋、日常念佛爲課。」『新纂校訂隱元全集』五一〇五頁。

- (10) 『普照國師年譜』…「萬曆四十六年戊午。師二十七歲、常慮出家緣弗就、一日登石竹山九仙觀祈夢。夢游深山岩崖中、有三僧坐磐石上、方食西瓜、剖而爲四。見師來、忻然以一分與之。師食畢遂寤。竊自喜曰…四沙門果、吾預其一。吾事濟矣。」『新纂校訂隱元全集』五一〇八頁。

- (11) 『普照國師年譜』…「光宗皇帝泰昌元年庚申。師二十九歲。按皇明通紀、是年七月、神宗登遐。八月初一、光宗即位。故以萬曆四十八年爲泰昌元年。是春二月十九日、師詣黃檗、禮賜紫鑑源壽公剃度。或者嘲曰…東林亦有佛耶。師應之曰…嘗聞佛性遍週沙界、豈獨外東林。昔廬山東林有慧遠、焉知今日東林無遠公乎。聞者嘆賞。師遂默願云…此處落髮、若不精修梵行、興崇法門、生陷泥犁。自是常持疏走民間募貲。冬聞道享法師講楞嚴經於海口瑞峯寺、特往聽之。初不解其義、至第四卷、畧有領會云。」『新纂校訂隱元全集』五一〇一頁。

- (12) 『普照國師年譜』…「天啓六年丙寅。師三十五歲。是年、金粟衆滿五百。分爲兩堂。…同參續知公、知師所証、謂五峰曰…老隱徹也。峰乃對衆勘云…汝有悟處、試道看。師云…道即不難、只恐驚群動衆。峰云…但說何妨。師打筋斗而出。峰云…真獅子兒善能吼哮。尋出堂作火頭。一日、密和尚室中、與衆論敬鬼神而遠之、衆答曰。師在門外立。密云…汝進來說看。師進前、豎火叉云…離不得這老賊、近不得這老賊。密便打云…汝作賊會那。師即拂火叉出云…賊賊。師与密和尚機語契合多如此。」『新纂校訂隱元全集』五一二一頁。

- (13) 『普照國師年譜』…「崇禎四年辛未。師四十歲。按行實云…是年、龔夔友、夏象晋二居士請住獅子岩。剃度性常、

性樂性善等、刀耕火種、併力合作、攻苦食淡。人所難堪、師怡然自得。嘗述偈云：「結個茅庵石竹西、喝天棒月走雲霓。猶憐路半未歸客、拂拂春風浪馬蹄。又按與中上座書云：「獅岩係吾手闢。汝能守之、前後有光。吾念足矣。」

『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

(14) 『普照國師年譜』：「崇禎五年壬申。師四十一歲。居獅岩絕頂、万仞壁立。作岩中自叙偈、有眉堆三尺雪、身護万年藤句。時有僧問：「如何是山中語。師云：野鳥傳古韻。僧云：如何是山中人。師卓然而立。僧云：恁麼則壁立千仞去也。師便打。」『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

(15) 『普照國師年譜』：「崇禎七年甲戌。師四十三歲。在黃檗西堂寮。一日、因衆頌百丈再參馬祖一喝三日耳聾黃檗聞拳不覺吐舌因緣。師目之俱未妥。乃頌云：「一声茶毒聞皆喪、徧界嚮懷沒處藏。三寸舌伸安國劍、千秋凜凜白如霜。呈上費和尚。即圈出貼法堂前示衆。遂鳴鼓陞座云：我有一枝拂子。是從上用不尽的。顧師云：汝作麼生奉持。師喝云：放下著。費云：再道看。師又一喝便出。費下座。師進方丈禮拜云：適纔觸忤和尚。費舉拂云：汝且將去行持。師接得便打一拂。費云：將謂報恩那。師又打一拂、便歸寮。二月、仍回獅岩住靜。」『新纂校訂隱元全集』五一三八頁。

(16) 『普照國師年譜』：「崇禎九年丙子。師四十五歲。住山頗久、四方仰重。一夜、夢一老人長眉皓首、荷甌負囊而入。師云：「老大大負累若此、不亦勞乎。老人放下行囊、出書幅單条并所負之物、見贈而去。醒以所夢告侍者玄生。生云：「斯乃吉夢、必有徵應。未幾果法通費和尚專使齋源流法衣至。師之道化往往徵兆如此。作曹谿源流頌三十五則。挽印初者旧卓龍吟居士偈。」『新纂校訂隱元全集』五一四二頁。

(17) 『普照國師年譜』：「崇禎十年丁丑。師四十六歲。是夏五月、黃檗耆宿同侍御心弘林公等、請師接席當山。師却之、而請益堅、遂應。先是、岩側有塊石如舟。遊客每以不平為嘆。師云：「時節若至、自然平矣。一夕、跏趺石上、持呪默祝龍天：「此去黃檗、法道果行、此石可平。端坐炷香歸室。次早侍僧報云：「奇哉。石已平矣。師云：不必說。吾祝已徵。因名曰自平石。作銘記之。」『新纂校訂隱元全集』五一四四頁。

(18) 『普照國師年譜』：「崇禎十一年戊寅。師四十七歲。春、建千日期場、開闔龍藏、答神廟賜藏恩也。按寺志云：「

三世祖中天圓公於萬曆辛丑赴闕請藏、居燕八年、未蒙諭旨、以疾卒京中。其徒孫興壽興慈復力懇、閱六載、會相國葉文忠公為奏聞。甲寅歲始頒藏至。師平時每語先人請藏艱辛之故、未嘗不惻然哽咽。至是翻藏、仰酬世德。」

『新纂校訂隱元全集』五一四六頁。

(19) 『普照國師年譜』・「順治十年癸巳。師六十二歲。∴。未幾、日本興福寺住持逸然奉王命差僧古石、齋書帛聘師東渡開化。先是數請未決、茲見其誠懇、特為上堂許之。」「新纂校訂隱元全集』五一八九頁。

(20) 『普照國師年譜』・「順治十一年甲午。師六十三歲。(中略)數日風浪大作、師書免參二字貼船頭、其浪遂平。時有巨鱗數萬隨舟而行。七月初五晚、抵長崎。是夜海上漁人咸見崎中紅光互天、意謂人家失火、各操舟救援。及至、其光隱矣。始知師入國之瑞應也。次早寺主逸然同檀越請進興福寺、法語五則。即日二鎮主謁見、謙恭致禮、各贈以偈。」「新纂校訂隱元全集』五二〇〇頁。

(21) 陳僊、陳仙、陳博と名乗る仙人。一六五四年、隱元禪師の渡航に当たつて、陳博と名乗る仙人は扶乩を通じて、送別の詩「寄贈和尚扶桑之行」・嚼盡黃根齒不寒、可知機下有禪關。三千桃葉初生日、以待真人共對澆。」を贈つた。寶永二年(一七〇五)、靈元上皇は、この詩を大いに重視し、黄檗宗の僧並びに参議藤原韶光、左大臣近衛家熙、天臺僧止堯憲などに文を書かせ、文集の『桃葉編』を編集させ、自ら序を寄せた。この『桃葉編』にある「寄贈和尚扶桑之行」の詩は、隱元禪師の弘法の見通し及び靈元上皇の誕生、即位についての予言で、またこの詩の作者である扶乩の仙人陳博が、実際に仙人と尊ばれる北宋の道士陳搏(八七一—九九九)の化身であると解釈された。靈元上皇はこの詩を通じて、皇室の神聖と尊厳を高めようと勘案したのでろう。参考…①『桃葉編』、三卷。藤原韶光編、日本寶永二年(一七〇五)。靈元上皇序。巻頭に「寶永二年十月二十三日」と記す「太上天皇御製桃葉編序」、巻末に「寶永二年歲次丙戌十一月朔旦、傳天臺教觀前大僧正沙門堯憲謹序」と記す「後序」がある。各巻題記…「参議正三位臣藤原朝臣韶光奉教撰、直指臣僧道澄、佛國臣僧道龜同校訂。」無名氏筆写本、日本愛知縣常滑市黄檗宗龍雲寺黄檗堂文庫存。②林觀潮「隱元隆琦と日本皇室―『桃葉編』を巡つて―」、『黄檗文華』第一二三號、京都黄檗山萬福寺黄檗文化研究所、二〇〇四年七月。

(22) 『普照國師年譜』…「明曆元年乙未。師六十四歲。(中略)會坐印上座齋賜紫龍溪大德等書請師住攝州普門。師曰…老僧年邁遠涉洪濤、以踐長崎之信足矣。那堪又應乎。既而二鎮主及竺印懇請不已、乃許之。(中略)師到普門、四方道俗、疑信參半、是非蜂起。師曰…鼻祖西來、有服毒之事。蘭溪東渡、有流言之謗。古人尚爾、而況於今、無足怪矣。」『新纂校訂隱元全集』五二二頁。

(23) 泰猷、太和尚。『普照國師年譜』…「寬文元年辛丑。師七十歲。…五月初八日、太和開創、仍以黃檗山萬福禪寺名之、志不忘舊也。故有東西兩黃檗之語。八月廿九日進山、法語三則。」『新纂校訂隱元全集』五二二頁。

(24) 『普照國師年譜』…「寬文四年甲辰。師七十三歲。…師自開山黃檗、多放禽鳥、但闕放生池以縱水族。是夏洛中有二信士舍金、即命工山門內鑿池。池成放生。」『新纂校訂隱元全集』五二四頁。又、「放生池偈」…「余開山黃檗、得林巒之秀氣、每放生靈、盡皆禽屬、惟水族無與焉為歎。適某信士輸金鑿池、甚愜所懷。今後得魚鳥之同樂、樂莫大焉。乃述偈以識。鑿地開山澈本源、長流德澤利無邊。池成碧湛從魚躍、林密扶疏放鳥喧。人得逍遙無掛礙、物能解脫即悠然。盡教鱗羽游江漢、其樂春秋一大年。」『新纂校訂隱元全集』三六四頁。

(25) 後水尾法皇宸翰…「敕。朕聞臨濟之道徧行天下、至天童雙徑光輝益盛。唯我日域久乏宗匠、幸黃檗隱元琦和尚受請東來、重立綱宗、闡揚濟道、大光於國、功不可磨。朕屢沾法乳、簡在朕心。故特賜大光普照國師之號、以旌厥德。欽哉。故諭。寬文十三年四月二日。」京都黃檗山萬福寺存、『新纂校訂隱元全集』五四六一頁載。

(26) 『普照國師年譜』…「寬文十三年癸丑。師八十二歲。…泊然長逝。實寬文癸丑四月初三日未時也。留身三日、容色如生。四部眾持香花而供者、靡不悲哀而戀慕焉。三日後鎖龕、百日內諸弟子伴龕坐禪、二時諷誦上供、以酬慈蔭。遵治命停龕三年、乃於延寶乙卯夏四月三日、當大祥之期、備法仗奉龕入塔、塔坐癸向丁、在開山堂之左。嗣法門人無得寧等二十三人、剃度弟子河陽常等五十餘人。」『新纂校訂隱元全集』五二六〇頁。

(27) 寶永乙酉、寶永二年(一七〇五)。

(28) ①『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戶時代諸刻本の編輯影印。②林觀潮『隱元隆琦禪師』、廈門大學出版社、二〇一〇年十月。③林觀潮『臨濟宗

黄檗派與日本黄檗宗』、中國財富出版社、二〇一三年三月。

(29) 大鵬正鯤『濟家黄檗山萬福禪寺派下寺院牒』、一卷。日本延享二年(一七四五)寫本、京都黄檗山萬福禪寺文華殿存。

(30) 『黄檗文化人名辞典』、「序」：「今日、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、わが国近世の文化を語るとき、黄檗禪や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている。」
『黄檗文化人名辞典』、大槻幹郎、加藤正俊、林雪光編著、京都思文閣、一九八八年十二月。

(31) ①柳田聖山：「近世日本の動きは、どの一面を取ってみても、黄檗文化の影響なしには解釈できない。」「近世日本仏教の改革―隠元」、『禪と日本文化』一八六頁、東京講談社、一九九二年六月。②柳田聖山：「明治以後の急激な西欧化によって、與かく見逃されていた靈性アジア的、本質的な反省の時與して、隠元生誕四百年を位置づけてよいのでないか。」『隠元誕生四百年 靈性アジアの本質的な反省の時』、『禪畫報』第二十號、四五頁、京都千真工藝株式會社、一九九二年夏。

(32) 習近平「在中日友好交流大會上的講話」、人民日報客戶端、二〇一五—〇五—二三 二二…二〇…二五。